

令和7年度

調布市中学生海外体験学習事業報告書



調布市教育委員会 教育部社会教育課

事業概要

事業の目的

本事業は、次代を担う調布市の中学生が、外国の文化、生活等を直接体験することで、多文化共生への理解を深めるとともに、国際的な視野やコミュニケーション能力を得て、国際社会で主体的に行動できるグローバルな人材へと成長する契機とすることを目的として実施するものです。

事業実施場所

オーストラリア連邦西オーストラリア州パース

事業参加者

市立中学校在学の中学2年生（20人）、引率者（5人）

事業スケジュール

- 5月25日（日） 第1回オリエンテーション
- 6月21日（土） 第1回事前学習会
- 7月 5日（土） 第2回事前学習会
- 7月26日（土） 第2回オリエンテーション／第3回事前学習会
- 8月 2日（土） 第4回事前学習会
- 8月16日（土）～8月24日（日） 現地体験学習
- 9月 6日（土） 事後学習会
- 11月1日（土） 全体報告会準備
- 11月9日（日） 全体報告会

現地体験学習行程表

8月16日（土）	調布市役所出発／パース到着
17日（日）	ホストファミリーと対面／ホームステイ開始
18日（月）	キングス・パーク及びカバシャム・ワイルドライフ・パーク訪問
19日（火）	現地校体験プログラムに参加
20日（水）	現地校体験プログラムに参加
21日（木）	現地校体験プログラムに参加
22日（金）	現地ユースリーダーとのフィールドワーク
23日（土）	ホームステイ終了／パース出発
24日（日）	調布市役所到着

事前学習会

本事業に参加する生徒の、現地での体験学習の効果をより高めるため、全4回の事前学習会を実施しました。学習会は、英語話者の講師4人がすべて英語で進行し、ホームステイ先でのコミュニケーションに必要な表現を学習したほか、現地校での交流プログラム（日本の魅力プレゼンテーション）に向けた準備も行いました。

学習カリキュラム

第1回	・自分や家族の紹介 ・紹介したい日本の魅力を考える
第2回	・ホストファミリーとの会話 ・グループの発表テーマを決める
第3回	・機内や入国手続での会話 ・発表のスク립トを作成する
第4回	・オーストラリアの基礎知識（食べ物、地図、スラング等） ・体調不良の伝え方 ・発表のリハーサル

参加生徒の声

- ・日常会話で使う英語を教えてもらったので、現地でそのまま使用することができた。
- ・事前学習会で学んだアイコンタクト、ジェスチャー、リアクションの3つのポイントは、ホストファミリーやバディとの会話でも実践できた。
- ・事前学習で学んだオーストラリアのスラングを、現地校やホストファミリーとの会話で使ったら相手が笑顔で反応してくれたのが嬉しかったです。またファミリーとカフェに行った時に事前学習で習った注文の例文を使って自分の飲み物を注文できました。



ホームステイ

本事業では、生徒20人を1～2人ずつに分け、現地の家庭へのホームステイを実施しました。参加生徒は、現地到着の翌朝にホストファミリーと対面し、出発日までの7日間の生活を各家庭で過ごしました。受け入れ先のホストファミリーのルーツや家族構成は、家庭ごとに大きく異なり、オーストラリアという国の多様性を感じる貴重な機会となりました。普段と違う生活様式や文化の下で過ごすことは、楽しいだけでなく、時に苦勞する場面もありますが、日本では得られない体験として、参加生徒それぞれが多くの学びを得ました。また、異なる環境での生活を通じて、普段の生活のありがたみを実感できる機会となりました。

参加生徒の声

- ・日本の家と比べて、設備が全て大きかったり豪華だったりした。平屋建ての家が多い。
- ・ホストファザーと朝早くに家を出て、ホストファザーの友達も一緒に朝ご飯を食べに行ったことが印象に残っている。
- ・ホストマザーと一緒にお菓子を作り、できたものをみんなで食べたのが楽しかった。
- ・散歩を1時間以上することが珍しかったけど毎日違うコースで散歩できた。
- ・夜とても早く寝るのに驚いた。
- ・食事の量が最初は多かったけど、たくさんコミュニケーションをとって、適切な量にしてもらった。毎日カレー味のものだったが、おいしかった。
- ・日々の生活の中で手伝えることはないかと聞いた。ホストファミリーとたくさん会話できた。



キングス・パーク／カバシャム・ワイルドライフ・パーク

現地の動植物にふれ、オーストラリアにおける自然保護についての取り組みを学ぶために、キングス・パーク及びカバシャム・ワイルドライフ・パークを訪問するプログラムを実施しました。

キングス・パーク

州立公園であるキングス・パークでは、植物の研究や保全、教育への利用を目的として、3000種類以上の植物が植えられています。生徒たちは、園内を自由に散策しながら、日本では見かけない植物を観察して過ごしました。



カバシャム・ワイルドライフ・パーク

オーストラリアの固有種を中心に、200種類もの動物を飼育している動物園です。動物たちと近い距離で触れ合うことができ、その生態をより実感できるのが特徴です。ガイドの方の説明を聞き、想像とは少し違う動物たちの姿に戸惑いながらも、日本ではできない体験をしました。



現地校体験プログラム

パース中心部近くにある私立学校「アーシュラ・フレイン・カトリック・カレッジ」で、現地の学生と共に授業を体験する3日間のプログラムを実施しました。参加生徒たちにはそれぞれ「バディ」と呼ばれる同年代の学生が2～3人つき、その学生たちと共に授業を受け、休み時間を過ごしました。また、同校には日本語のクラスがあり、日本語クラスを受講している学生たちとの交流も行いました。

参加生徒の声

- ・クラスがなく、日本の中学校より大学に近いような感じだった。
- ・宗教、ファッション、演技など日本にはない授業が多く、その他にも体育でゴルフに行ったり、調理の授業で作ったものを昼食にしていたり、新鮮で楽しかった。
- ・皆、自分のパソコンを使ってレポートを書いたり自習したりしていた

交流プログラム

現地校体験の最終日には、アーシュラ・フレイン・カトリック・カレッジの学生たちに日本文化を紹介する交流プログラムの時間を設けました。参加生徒たちは3つのグループに分かれ、事前学習会で題材決めから発表の準備まで行いました。

1つ目のグループは「日本のお祭り」をテーマに発表しました。1人目が「屋台」について発表し、続く他の生徒は「だるま」、「花火」と調布独自の「お祭り」を構成する要素について、実物や写真を見せながら発表しました。最後は、現地校の学生に浴衣の着用体験をしてもらいました。



2つ目のグループのテーマは「ソーラン節」です。まず始めにソーラン節とはどのような踊りであるかを英語でプレゼンし、その後は法被を着た生徒たちが音楽とともに実演しました。現地校の学生たちを少人数のグループに分けて振付を教え、全員で踊って楽しく体を動かしました。



3つ目のグループは「茶道」をテーマにしました。茶道の説明は日本語でも難しく、スピーチの原稿を用意するのに苦労していましたが、本番はしっかりと発表できていました。茶道を習っている生徒たちがお点前を実演し、点てたお茶を現地校の学生に試飲してもらいました。



フィールドワーク

生徒たちを5人ずつのグループに分け、それぞれに現地の高校生～大学生を「ユースリーダー」として配置し、グループでのフィールドワークを1日かけて行いました。前半は、パース市内中心部の散策を行い、電車で移動した後、午後はフリーマントルの散策を行いました。

フィールドワークは、ワークブックに記載されているミッションをこなしながら、パースの文化や歴史について学ぶものです。以下は、ミッションの一例です。

ミッション：多文化が交わる場所

オーストラリアは約180もの異なる国出身の人々で構成されている街です。特にパースでは、2人に1人が外国で生まれた親を持っています。このように多文化が交わる場所には、日本からも150年以上前に移民がやってきていました。日本からの移民は、その昔とても危険な仕事をしていました。

西オーストラリア州立海洋博物館に行って「ティクセンB47」という船を探しましょう。展示をじっくり観察してその「危険な仕事」とは何だったのか、謎を解きましょう。



事後学習会

帰国して2週間後に、事前学習会と同じ講師を迎えての事後学習会を行いました。ここでは、ゲームやグループワークを通して、参加生徒がパースでの体験を振り返る機会を設けました。

現地で「文法が正確でなくてもとにかく話すことが大事である」と身をもって経験した生徒たちは、出発前よりも積極的に発言していました。この変化は、講師や引率者にとっても大変印象深く、参加生徒の成長を改めて実感する機会となりました。

全体報告会

次年度以降の対象生徒や保護者、地域の方々に事業の成果を報告するため、令和7年11月9日（日）に全体報告会を文化会館たづくり12階大会議場で行いました。

現地で撮影した動画や写真を見ながら生徒たちが各行程について発表したほか、長友市長とのトークセッションも行われました。トークセッションでは、現地での驚きや苦労も含め、生徒たちのありのままの考えを聞くことができました。来場者アンケートでは「生徒の成長が見ているこちらにも伝わり、意義ある事業になったのだと感じた」、「次年度以降、自身の子どもにもぜひ参加してほしいと思う」などの声をいただきました。



おわりに

事業後、参加生徒に実施したアンケートで「事業を通じて考え方が変わったことはあるか」と質問し、以下のような回答がありました。

- ・英語に対して、今までは「勉強のための英語」だったけど、実際に使うことで「コミュニケーションの道具」だと実感できた。
- ・異文化に対して、日本と違う習慣や価値観を知って、「違いは当たり前なんだ」と思えるようになった。
- ・この海外体験事業を通して、日本に出て外国人の人たちと生活するというものの考え方が少し変わった。初めは緊張や不安が大きくあまり良いイメージはなかったが、行ってみると新しい発見や学びがあってとても充実した9日間になったと思う。
- ・この事業に参加する前は日本にしか目を向けていなく、海外の事にあまり興味を抱いていなかったけど、この事業に参加して世界は広いと感じるようになり、様々なことに目を向けるようになった。

9日間は決して長い期間ではありませんが、家族と離れて外国で生活することは、短期間であっても生徒たちに様々な影響を与えます。この事業での経験をきっかけに、生徒たちが広い視野を持って物事を考えられるように成長することを願っています。